

知っているようで知らない ムサビキャンパスのはなし

松永安光

近代建築研究所
代表取締役

鈴木 明

武蔵野美術大学
建築学科主任教授

昨年7月、「DOCOMOMO JAPAN*1」から、2009年に150選として選定されている「武蔵野美術大学アトリエ棟」(現:4号館)に、「武蔵野美術大学 正門、本館、中央広場、デザイン棟、美術資料図書館、鷹の台ホール」(現:武蔵野美術大学鷹の台キャンパス 正門ゲート、1号館、中央広場、7号館、美術館棟、鷹の台ホールA号館)が追加選定されました。そのポイントは、教育施設として現在も使われ、外部空間が公共的な性格を持つこと。また、1960年代の日本の近代建築に特徴的な要素、日本の伽藍配置に基づいていることからです。さらに芦原建築設計研究所*2の図面他のアーカイブを整理し、展覧会に仕立て、出版物をまとめたことも評価されました。私たちムサビ卒業生、特に建築学科OB・OGとしては、自分たちが学んだキャンパスの建築が、まだ若かった近代建築として、文化的にも歴史的にも意義ある建築物であると認めていただいたことを大変な誇りと思っています。

今日、数々の話題作を世に送り出し続ける建築家・松永安光さんにおいていただきました。この機会にムサビキャンパス初期建築群を、当時の芦原建築設計研究所で設計に携われた経験について、またムサビ建築が立ち上がったその時代について伺っていきます。

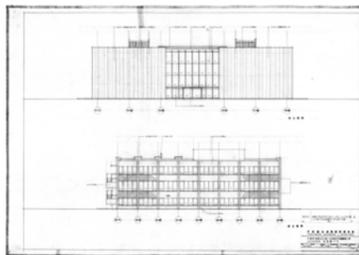
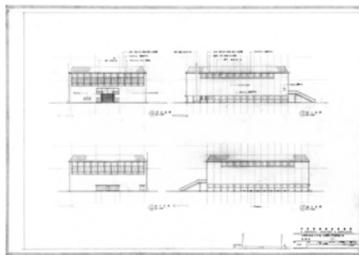


芦原建築設計研究所で

武蔵野美術大学の校舎を担当する

松永 1965年、東京大学工学部建築学科を卒業して、すぐ芦原建築設計研究所に勤めました。事務所では、武蔵野美術大学の「アトリエ棟(現4号館)」が竣工し、「7号館」の工事が始まっていました。まだ入ったてでしたが何度も現場を見に行きました。これらの計画は建設中から注目を集めていました。アトリエ棟の構成について面白い話があります。当時、芦原先生は岡山で仕事をしていました。4号館を担当した保坂陽一郎さん(本学科元教授)が、現場の帰りにお土産で吉備団子を事務所を持って帰ってきた。包みを開けると小さな団子が経木で仕切られた格子にひとつひとつつまっていた。それを見た芦原さんは「これいいじゃないか!」と、その時アトリエ棟の格子状梁の構成が決まったというわけです。芦原先生はいたるところで吹聴されていました(笑)。

私が設計担当したのは「中央広場」の形成後、「美術



上:体育館。下:美術資料図書館(現美術館)。

資料図書館(現美術館)」と「体育館」です。と言っても大学を出たばかりでしたから、一部の図面を描いたということです。建設が始まって現場も見ました。「体育館」の建設費は、坪あたり10万円でした。両側にコンクリートの壁を建て、屋根を立体トラスとしてふたつの壁を繋いでいるという構成です。ところで「美術資料図書館」も同じく、ふたつのヴォリュームを建て、鉄骨でつなぐという同じ構成です。こちらは私が基本的な構成を提案しました。やはり坪あたり10万円、実にローコストです。構造設計を担当されたのは織本 匠先生(本学科元教授)です。芦原先生が好きな言葉は「簡素明快」でしたが、それを合理的な構造で解決し実現しています。設計体制は、建築を芦原義信、構造を織本 匠、設備を犬塚恵三、「AOI(アオイ)」体制と呼ばれるチームで、一貫してこなしていました。図面はほとんどがヴォイドの空間だから、私はあまり図面で描くところがなかった(笑)。

ムサビキャンパスのマスタープラン

松永 芦原先生はその頃、「外部空間の構成」という本を博士論文として書かれていました。先生は、かねてから「建築は単体では完成しない。外部空間と一体として考えないといけない」と主張をされていました。それはイタリア旅行で訪れた伝統的な街の中にある広場での経験に基づいています。それを日本の現代的な建築計画の中で実現しようと、武蔵野美術大学のキャンパスで考えたのですね。繰り返しになりますが、「建築は建築単体では成り立たない。外部空間と一体としてあるものだ」と芦原先生は常々おっしゃっていました。

鈴木 DOCOMOMO JAPAN会長の渡邊さんによれば、一昨年、日本に滞在されたアナ・トストエス(Ana Tostoes/3代目会長/リスボン工科大学教授)さんがムサビキャンパスを見学された際、「4号館だけではなく正面のゲートからの軸線、そして中央広場を取り巻く建築群など、すべてを含めて評価するべきだ」と言われた。それが、今回のDOCOMOMOによる追加選定につながったと聞きました。



体育館建設が始まった武蔵野美術大学キャンパス。

松永 まず真ん中に広場をとり、そのまわりを建物を取り巻く。それぞれ東西と南北の軸線を設定した。ゲートの建物(1号館)は、わざと低くしてありますが、そこを抜けると広場に出るという劇的な効果を狙ったと、芦原先生はおっしゃっていました。

鈴木 都市神話的に囁かれていることですが……。ゲールマップの衛星写真でムサビキャンパスを眺めると「日本一」と読める、と。「日」は1号館、「一」はなんとくですが美術館(旧美術資料図書館)、そして「本」は中庭の植栽や芝生で構成した園路などで、うまい具合に斜めの線が見える(笑)。そこで、芦原先生に続いて松永さんも留学されたハーヴァード大学キャンパスを調べました。同じように中庭に斜めの園路がつけられているではありませんか!

松永 アメリカの大学キャンパスには、伝統的に周囲を建物で囲まれた芝生を植えた広い中庭がある。そしてどん詰まりには図書館があります。たしかにハーヴァードの伝統が武蔵野美術大学キャンパスにも受け継がれているのかもしれない。

鈴木 エストス教授が、特に中庭から見ると「美術館(旧美術資料図書館)」と「7号館」の間から見ると「鷹の台ホール」への視線の重要性を指摘した、ということ。また、ムサビキャンパスの建築群の特徴のひとつは、構造やデザインを画的に統一するのではなく、それぞれ個性的な建築からなっていることです。特に「鷹の台ホール」は四角錐の屋根でキャンパスの他の建築とは異なる。その形が、伽藍配置的な建築群の中でポイントとなっている。DOCOMOMOとして1960年代は日本的な要素を入れるということも

重要な視点だったと伺っています。それを見出していたことに感謝しました。

松永 そうですね。芦原先生は伽藍配置についても触れられていました。鷹の台ホールは法隆寺金堂の配置などにも通じている。私は東大を出た後、そのまま東大の大学院に行くのではなくハーヴァード大学大学院(GSD)に行きたいという野心がありました。芦原建築設計研究所で5年働き、ムサビの現場がそろそろ竣工に近づいた時、芦原先生に留学の相談に行きました。すると「行って来い!」と励まされ、事務所に籍をおいたまま留学しました。これは暗に帰国したら戻って来い、ということでしたけれどもね(笑)。

私は、ハーヴァードに芦原建築設計研究所の実務を経験してから行ったので、9ヶ月で学位を修得しました。その後、TAC(The Architects Collaborative/

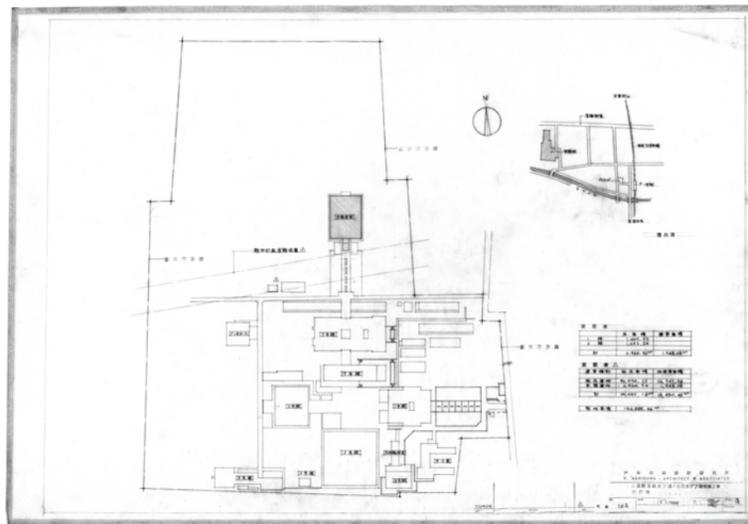
建築共同体)で1973年夏まで働きました。TACですが、グロピウスがハーヴァードにおける最初の弟子たちと始めた設計事務所です。彼はナチスによりパウハウスに圧力がかかり英国に移り、さらにヨーロッパから近代建築をアメリカに持ち込み、ハーヴァードの院でその思想を広めた。事務所は大学のすぐ脇にあつてすごく繁盛していた。帰国すると芦原建築設計研究所に復帰しました。その後、SKM設計事務所に加わりますが、アソシエイトのひとり、高俊民さんはハーヴァードの級友です。その後、私は独立。1992年に近代建築研究所を設立して現在に至っています。

武蔵野美術大学における建築の特色

松永 中2階的なスラブで半階分上がるけれども、空間的には繋がっている「スプリット・フロア」があります。芦原先生がハーヴァードで学んだ師マルセル・ブロイヤーの影響ではないでしょうか。寝殿造りを参考にしたともおっしゃっていましたが、ムサビキャンパスでは、「1号館」「7号館」「美術資料図書館」に見られます。公共性を持った建築の中で、これを実現したのは珍しいのではないのでしょうか。芦原先生は、「流動する空間」が大事だとおっしゃっていましたね。

初めは新潟県の「松浜クラブハウス」(1957年)でやり、さらに「ソニービル」(1966年)で大規模に展開した構成ですね。スプリット・フロアは断面図で描いてみないと分からない。芦原建築設計研究所では、模型を使った断面スタディもよくやりました。当時は、模型によくバルサを使いました。コンペの時には大きな模型を作りました。二川幸夫さんに撮影をお願いした時に「時計がある」と言われ、慌てて誰かの腕時計を会議場の模型の壁につけたり……。国際文化会館のコンペの時は、ひと晩つきっきりで撮影しました。

「東京会館レストラン」のインテリアをやった剣持勇さんをはじめとして、芦原先生の周りには有名人が多かったですね。武蔵野美術大学の計画にアーティストの協働はありませんでしたが、所員がこのようなアーティスト的なデザインに憧れてもいて、凝った断面の手すりとかを密かにやっていたね。アルネ・ヤ



体育館建設時のキャンパス配置図。

コブセンのらせん階段を参考にしたりしたところもあります。一方、近年の大手設計事務所がオフィスビルで常套手段とする、ホワイエを押し込んだような構成は、武蔵野美術大学キャンパスにはありません。教室の前まで外の空気。外部空間が浸透するような開放的な建物を目指しています。

壁面開放しコンクリートのレリーフ

松永 矢矧(やはぎ)パターンによるレリーフは、弓矢の矢についている鷹の羽を圖案化した型枠で雛型を作りコンクリートを打ち込んでいます。手間がかからないし、見た目は良いし、タイルのように剥離脱落することもない。武蔵美では地上階には石を貼っています。大きな平面をどうしたら面白くできるか、とにかく単純になりそうな壁面にヴォキャブラリーを増やそうと、みんなで考えました。

鈴木 ところで、当時のムサビ学生はどんな風にキャン

パス生活を送っていたのでしょうか?

松永 現在はだいぶ変わりましたが、最初はかなりバカだったです。学生たちは中庭を裸で走り抜けるなんていうことをしょっちゅうやっていました(笑)。鬱憤を晴らすというか、結構海千山千が集まっていたりしていましたね。



壁面に矢矧パターンを使用した7号館全景。

松永安光(まつながやすみつ)

1941年東京生まれ。1965年東京大学工学部建築学科卒業、1965~70年芦原建築設計研究所所属。その間ハーヴァード大学大学院(1972年、修士課程修了)留学、TAC(アメリカ)勤務。1979年SKM設計計画事務所設立(柴田知彦、高俊民と共同主宰)、1992年近代建築研究所設立(代表取締役、現在に至る。1997~2007年、国立大学法人鹿児島大学工学部教授。主な作品は、INSCRIPTION(茨城県つくば市/1987年/JIA新人賞)、中島ガーデン(1991年/日本建築学会賞)、熊本市宮託麻団地(熊本県/1994年)、パティオス4番街(千葉県/1995年)、久我山宣教会(東京都/2009年)、オガールプラザ(岩手県紫波町/2012年)、住田町役場(岩手県/2014年)、大稲町文化交流センター「おしゃっち」(岩手県大稲町/2018年/林野庁長官賞)など。

*1 DOCOMOMO

Documentation and Conservation of buildings, sites and neighbourhoods of the Modern Movement

「モダンムーブメントにかかわる建物と環境形成の記録調査および保存のための国際組織」。1920年代近代建築発祥の地オランダで1988年に設立。「20世紀の文化遺産を21世紀に伝えなければ」という危機感から立ち上げられた。2年に1度国際会議を開き、研究成果や情報交換を行う。保存に関する学術的研究や調査に始まるが、博物館的な保存修復だけではなく、さまざまな活用とサステナビリティを結びつける方法を探る。

DOCOMOMO JAPANは日本支部として、近代建築の再評価のための活動を行うとともに、取り壊しが予定される近代建築について保存要望書を提出するなどの保存活動に取り組んでいる。来年、日本で国際会議が開催される。武蔵野美術大学キャンパスもエクスカージョンで見学コースとなることが予定されている。ムサビ学生はもとより日月会会員諸氏の協力支援をお願いしたい。なお座談会前に、ムサビキャンパス追加選定の理由などを伺うなど、渡邊研司会長には大変世話になりました。

http://www.docomomojapan.com/registration/

*2 「旧アトリエ棟」から「鷹の台ホールA号館」など、武蔵野美術大学初期の校舎設計当時の事務所名称は「芦原義信建築設計研究所」、本稿では1970年に改称した「芦原建築設計研究所」を用いました。

図版提供: 武蔵野美術大学 美術館・図書館所蔵

INTERVIEW

透明人間が踊っているように。 単純な興味から始まった アート活動。

小松宏誠 [37期]

小松さんはアートシーンの第一線で活躍されていますが、そもそも建築学科に入ってからのどのような経緯でアートの道に進んでいったのでしょうか？

ムサビに入って製図などの授業を受けていて、漠然と「思い描いていた美大生活と違うなあ」というようなことを思っていたんです。そんなもやもやを感じていた頃、基礎造形の授業で土屋先生とお会いして、その流れで先生のサンパウロピエンナーレの仕事を目にする機会に恵まれました。安直な感想ですけど、それを見た時に「こんな面白いことができるんだ……」「僕もこれやりたいっ！」って思っただけなんです。それがアートに足を突っ込むことになったきっかけですね。奇しくも一番初めに見たアート作品がいまだに自分にとってのベストだと思っているので、振り返ってみると相当ラッキーな出会いだったんだな。とはいえ、僕の学生時代は土屋先生は客員教授ではなかったの、4年生のゼミは比較的アート作品などを自由に作れる空気があった宮下先生のゼミを選びました。



「六本木ヒルズ ウェストウォーク クリスマスデコレーション」。
photo: YAMAGUCHI KENICHI (RRD)

なるほど。それで卒業研究/制作はどのようなものを作ったんですか？
卒業研究は……「ブレイクダンス」です。案の定「こいつ、やばいな」みたいな空気もあったんですけど、そんなことを真面目に聞いてくれるのも宮下先生だけだったように思うので感謝しています。色々自由とやっていた中で、「透明人間が踊っているように感じさせるために、床から物体を舞い上がらせたい」と思うようになって、それで初めて「浮赤」という赤い羽根の作品を作りました。羽根という素材にしたのは、葉っぱなどさまざまなもので検証した時に一番飛んだということ、手軽かつ大量に買うことができたというのが理由です。あとは当時、伊東豊雄をはじめ、その後が続く妹島和世さんとかが台頭して「建築がどんどん軽くなっている」タイミングで、僕はミラーだったので単純にその感じをシンプルに捉えて、その「軽さ」に憧れたというのもありました。

小松さんの創作活動のテーマである「鳥」や「羽根」は、課題や当時の時流から生まれたものだったんですね。ところで、今現在も同様のテーマで制作を行っています。なぜそこまで一貫したテーマ性を持って進められるのでしょうか？一度くらい他に興味も移ってもおかしくないと思いませんか？

外からの見え方としてはそう見えるかもしれませんが、意外と自分自身ではぶらしている感じがあるんですよ。鳥や羽根をテーマにしているからといって、

それだけでは世界が狭すぎて危ない。なので、「こういうのも入れてみよう!」といった具合で、さまざまなものを取り込むようにしています。純粋にアートをしている人たちが「それ、普通はやらないだろ」って思うようなところもやりたいんですよ。アートとデザインの線引きはなんとなく理解しながらもわざとそういうことをしているんですけど、捉え方によってはむしろ主張が絞れてないアーティストだとも言えますね。自分としては良い意味として捉えています。

さまざまな価値観に触れることが大事とお考えということですか？
そうですね。大学を卒業してから7年くらい、「アトリエオモヤ」というチームでさまざまな創作活動をしてきた経験が大きな影響を与えているかもしれない。そこでの時間がとても濃密で、個性の強い作家志望の人たちが集まってグループワークをしていたんです。そこでは譲るといことはなくて、全員で押し合うようにして作品の着地点を模索する日々の連続でした。僕としては広く構えて共通点を見つけるのが良いだろうと思っていたので、そういう経験も相まって、いまだに「自分自身でぶらす(＝広く構える)」ことをしているんだと思います。

お話を聞いていく内に、鳥や羽根はそれ以外のものとの接点——いわば、繋がるための一つの「手段」としてあるように感じました。2014年の「六本木ヒルズ ウェストウォーク クリスマスデコレーション」のアートワークにも場所との運動性のような、サイト

スペシフィックアートの側面があるように感じましたが、いかがでしょうか？

「場所」に対して反応している感覚が強くなるんですよ。[この場所には〇〇が原因で上昇気流が生まれていて、それを捉えて……]という風に、この場所だからこういうものを作りたいというように感じる事が多くあります。まさにそういう意味ではサイトスペシフィックですね。これは常々感じる事なんです。この場所だからこそ”の作品を作る時、建築を学んでいて本当に良かったって思うんですよ。フィールドワークの現場を観察する洞察力的なことをももろんですが、僕らのやっていることのほとんどが重力に逆らいながら何かを立ち上げる訳なので、そういった時に肌感で分かるんですよ。こうやったら強くなるのか。しかも僕の場合、軽量な物にこだわっているんで、軽量であればあるほど壊れやすい。そこをどう軽いまま強度を担保するかってところなんかは、今振り返ってみると、建築をやったからこの興味・関心なんだらうなと思います。



浮かすことを目論んだ処女作「浮赤」。

小松宏誠 | Kosei Komatsu
アーティスト
1981年生まれ。2004年武蔵野美術大学建築学科卒業。2006年東京芸術大学大学院修了後、アトリエオモヤのメンバーとして活動を開始。2014年に独立。「浮遊」への興味から「鳥」に夢中となり、現在は「鳥」や「羽根」をテーマとした作品を展開中。自然が持つテクノロジーと人間の生み出したテクノロジーが交錯する表現を追求している。

TOPICS

ランドスケープアーキテクトとして、 ノルウェーで働いてみて。

河野明慧 [45期]

私は現在、ノルウェー北部の中心都市トロムソという街にあるランドスケープアーキテクチャーの事務所で働いています。トロムソは「北極圏のバリ」とも称され、その中でも最も都市化が進んでいるTromsøyaという島に拠点があります。Tromsøyaの人口は約4万人、面積はムサビがある小平市とほぼ同じくらいの大きさです。トロムソ大学やオスロ建築大学ランドスケープアーキテクチャー学科の分校コース、アートアカデミーなどがあり、カルチャーイベントなども盛んに行われています。小さい街ながらデザインに対する感覚が高い点は、瀬戸内のようなローカルながらも、アートにより洗練された街の雰囲気似ているかもしれません。

私が勤務する事務所Lo:Le landskap og plan ASは、Snøhetta出身のMari A. Aston Bergsetが2016年に立ち上げ、現在はポストカナダ人の同僚と私の3人で働いています。プロジェクトはノルウェー各地に分布しますが、なかでもノルウェー北部が多く、現在は学校、公園、墓地、住宅、ホテル、オフィスの外構等、多岐に渡るジャンルの仕事を手掛けています。私の担当は学校とそれに隣接する公園、街路をデザインする複合的なプロジェクトで、近代化による車道に重点を置いた開発の仕方から、現代の電動自転車やシェアカーが普及し車社会が縮小していくなかで今後のまちのあり方を考えることが求められています。立案中の車道を規制し歩行者メインの公園にする計画をきっかけとして、さまざまな場所で良い影響が生まれることを期待しています。

また、これら一連の仕事を通して感じるノルウェーと日本の街並みの違いがあります。建築物や植栽はもちろんです。特に排水機能の違いが顕著。日本ではどこを歩いても排水溝がありますが、ノルウェーで



上:下:ノルウェー北部の中心都市トロムソの風景。
上:©Akie Koh 下:©Lo:Le landskap og plan AS

はただ地表面にくぼみをつけてそのまま流す、もしくは排水機能をつけた緑地帯を設けて自然吸収させることが多い印象を受けます。雪や春の雪解け水が多いため、排水計画は極めて重要ですが、それに対するアプローチが至ってシンプルだったり視覚的にもワイルドだったりするの面白いところ。自然現象に対してテクニカルに対応する日本とは違い、必要最低限のことしかしないノルウェーの対応は、国民性だけでなく、厳しくも美しい自然環境で育ったノルウェー人として当然のことなのかもしれません。

河野明慧 | Kono Akie
ランドスケープアーキテクト
(Lo:Le landskap og plan AS, Tromsø)
1990年生まれ。ノルウェー在住。2012年に武蔵野美術大学建築学科卒業後、都内のランドスケープデザイン事務所に勤務。その後ノルウェーのオスロ建築大ランドスケープアーキテクチャー学科修士課程に正規入学し、2017年に卒業。北ノルウェーを題材にした修士制作ではランドスケープアーキテクトとフォトグラファーとしてのスキルをあわせ、作品はオスロのギャラリーで展示販売されるなど、修士制作の延長活動も行っている。

INFORMATION

2018年度日月会企画イベントの報告

4月21日 | フォルマフォロ・セミナー第14回
「当事者として建築と向き合う」
宮崎晃吉/株式会社HAGISTUDIO 代表取締役、一般社団法人日本まちやど協会 代表理事、株式会社まちあかり舎 取締役
対談:小津誠一 [23期]/日月会会長、有限会社E.N.N.代表
司会進行:石井 健 [26期]/日月会副会長、ブルースタジオ 執行役員

第14回目となるセミナーでは、東京藝術大学建築学科を卒業後、アトリエ設計事務所を経て、設計活動の傍ら飲食業や宿泊業など幅広い活動を展開する宮崎晃吉さんに登壇いただきました。前半は、学生時代の過ごし方やアトリエ就職後の活動についてははじめ、「HAGISO」が生まれるきっかけや「hanare」を始めた経緯、谷中という場所との関わりなどを話していただきました。後半の対談では、日月会会長の小津誠一さん、副会長の石井健さんを迎え、さまざまな建築との関わり方へと話題が発展していきました。

7月7日 | 日月会建築賞
太陽賞:「波状摩天楼」塩澤芳樹
満月賞:「Aoyama park campus」近藤明日香
三日月賞:「フラットコダイラ」鈴木・常山スタジオ 2班
新月賞:「ストライプに沿って滑りぬける。」武田涼花
七夕賞:「あそびば」佐橋 颯

ご挨拶

昨年、日月会ではいくつかの新たな取り組みを始めました。「フォルマフォロ・セミナー」では、東京藝術大学建築学科を卒業された宮崎晃吉さんをお招きして開催しました。同セミナーでは、これまで日月会会員(＝武蔵野美術大学建築学科出身者)をゲストスピーカーとして招いて開催してきましたが、日月会会員の皆様はもちろん、一般の方にとっても有意義な会になればと考え、同窓生という枠にこだわらずにゲストを選定させていただきました。そういった意味では、ローカルなまちを舞台に「建築家の仕事を拡張する」ような宮崎さんの多彩な活動は、参加いただいた皆様にとって十分に刺激的な内容となったと思います。

芸術祭の「サロン風月」では、芦原義信名誉教授が設計した本学の建築群が「DOCOMOMOJAPAN 日本における

石井大吾 Ishii Daigo

事務局長 [37期]

審査委員長:田村恭彦 [28期]/田村建築設計事務所 代表
副審査委員長:井口雄介 [41期]/アーティスト
ほか審査委員:井上裕子 [11期]/アトリエノット 代表
福岡一郎 [13期]/福岡建設 代表
阪 健吉 [20期]/大林組 設計本部 建築設計部 部長

10月27日 | サロン風月2018

トークライブ1
対談:「ムサビ建築群の価値と四方山話」
松永安光/近代建築研究所 主宰×鈴木 明/武蔵野美術大学教授
トークライブ2
講演:「Public Art for Urban Design—彫刻家の視点から」
吉野美奈子/モニュメントアーティスト・彫刻家・画家
[夜塾]

かつて芦原建築設計研究所で本学の計画にも関わった松永安光さんにお越しいただき、鈴木明主任教授を交えて、鷹の台キャンパス計画や芦原義信名誉教授との思い出などを話いただきました。後半では、吉野美奈子さんに美術との関わりを基軸に、渡米から現在の活動に至るまでの経緯を作品の解説を交えながら講演いただきました。

小津誠一 Kozu Seiichi
日月会会長 [23期]

モダン・ムーブメントの建築」に追加選定されたことを記念して、芦原建築設計研究所にて本学設計に携わった建築家・松永安光さんをお招きし、当時の懐かしい写真とともに本学建築群の計画時の逸話や思い出話を伺う機会となりました。こうした活動の一方で、日月会ロゴデザイン、パンフレット、ウェブサイトのリニューアルをはじめ、新規会員の記念品製作にも取り掛かっており、近くお披露目できると思います。

さらに今年は、日月会の活動領域を東京以外の地方へと広めたり、卒業生と現役学生の交流の機会を設けたりするなど、日月会が会員の皆様にとっての交流の広場「フォロ」となり、メディアとしての同窓会となれるように活動を展開していきたいと考えています。皆様には引き続き、今年も日月会へのご支援を賜りますよう、宜しくお願ひ申し上げます。

Forma-Foro

19 フォルマ・フォロ | 武蔵野美術大学建築学科・日月会
MAR.1.2019 | VOL.19



「日月会建築賞」受賞者・審査委員による記念撮影。



セミナー集合写真。

表紙写真
「六本木ヒルズ ウェストウォーク クリスマスデコレーション」。
photo: YAMAGUCHI KENICHI (RRD)

編集後記
今号は、私が編集担当として携わる最後の号になりました。前任の広報担当・尾内志帆さんに比べたら「自分はまだまだ非力だなあ」と思うばかりなのですが、育ててくれた母校に少しでも恩返しできていたら嬉しい限りです。今振り返ると至らぬ点ばかりでしたが、多くの方々のご厚意とお力添えがあったからこそ、無事責務を全うできたと思います。この場を借りて、本誌でご協力いただいた皆様から心からお礼申し上げます。[JT]

本誌のデザインをしながらさまざまな卒業生の方々と会ったり活躍を知ることができ、ムサビ建築の可能性を感じました。日月会のような同窓会があることはとても素晴らしいことだと思います。本誌に携われて感謝です。[KO]

編集:瀬澤純希
デザイン:小田権史
印刷:株式会社山田写真製版所
発行:武蔵野美術大学建築学科
同窓会・日月会
http://www.nichigetsukai.com
東京都小平市小川町1-736
武蔵野美術大学建築学科研究室内

